

大東文化大学 東洋研究所所報

2011.12 No.56

目次

二つの編纂事業を終えて	兵頭 徹 …… 1	〔研究員の著書紹介〕	
公開講座「アジアの民族と文化」		高橋康浩 著『韋昭研究』	渡邊 義浩 …… 6
第1回講座概要	…………… 渡邊 義浩 …… 3	片岡弘次教授が日本翻訳家協会の	
第2回講座概要	…………… 小林 春樹 …… 4	「特別賞」を受賞	…………… 6
第3回講座概要	…………… 岡倉 登志 …… 5	東洋研究所刊行物	…………… 7
		新刊案内	…………… 8

二つの編纂事業を終えて

『松方正義関係文書』 全20巻

『昭和社会経済史料集成』 全38巻

東洋研究所教授 兵頭 徹

今から35年前の1976年4月、東洋研究所には、ともに大東文化を卒業した大東OBの先生方が中心となり、未公開の資料集を集成刊行しようということで、二つの共同研究班が同時に立ち上がりました。このとき、筆者は大学院生としてオブザーバーの資格で両方の研究班に参加させていただくことができ、1982年6月から東洋研究所の専任研究員となって資料集の刊行に責任を負うことになります。

その一つは、故藤村通先生、大久保達正現名誉教授を中心とするもので、明治前期に大蔵卿・蔵相として「松方財政」を展開した松方正義に関する研究班であります。当時、松方に関する資料は、(1) 国立国会図書館憲政資料室寄託「松方正義文書」(主として2,500通余の書簡と伝記的資料など)、(2) 松方家那須別邸保管「松方家萬歳閣資料」(「侯爵松方正義卿実記」・千本松農場資料など)、(3) 旧大蔵省文庫所蔵「松方家文書」(大蔵省在官中の財政・金融政策関連資料など)に3分割され

て所蔵されていきました。研究班では、これらのうち(1)(2)を完全に収録し、(3)については、松方宛の意見書・建議資料を中心に収録することを目指したのです。

研究班設置当初は、学内外の研究者を加えて夏休み、冬休みも厭わず毎週土曜日に大久保研究室に集まり、くずし字の解読と取り組みながら刊行の準備を進め、1979年11月に『松方正義関係文書第1巻』を刊行し、爾来、毎年1巻を発刊し続け、2001年10月に補巻を出して全20巻の完結をみる事ができました。



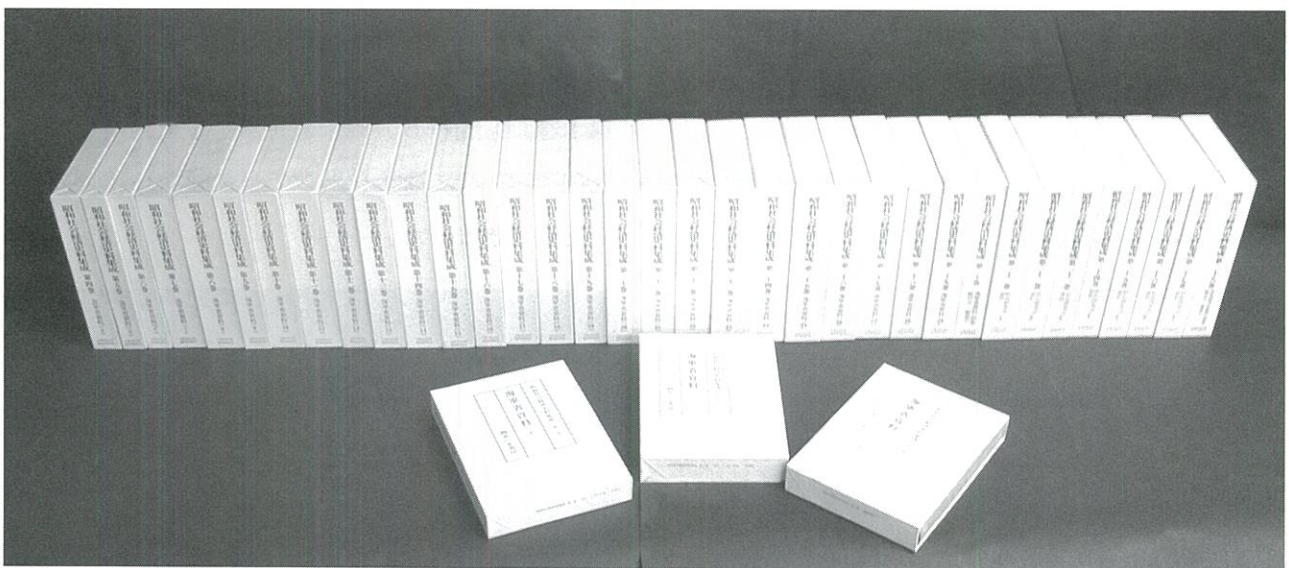
二つ目は、大久保達正現名誉教授、永田元也現名誉教授、前川邦生現経営学部教授らの先生方が中心となったもので、故土井章先生が関係されていた昭和同人会に保存管理されていた戦時下の社会経済関係の資料を集成刊行しようとする研究班であります。これらの資料は膨大なもので、目録作成に始まり、複写・分類・解読・整理など、大変厄介な作業を伴うものであります。研究班では、これを第Ⅰ期、第Ⅱ期と分けて、1978年11月に『昭和社会経済史料集成 第1巻』を発刊しました。

第Ⅰ期の「海軍省資料」（全30巻）には、海軍省調査課が直接作成した資料と、情報収集活動によって集められた資料を収録しています。資料の性質は、単に軍事的情報にとどまらず、国の内外にわたる政治、外交、経済、社会、思想、文化などの広範囲に及ぶものとなっています。本集成には、1934年から1945年8月に至る間の資料2,691件を収録しました。

第Ⅱ期の「昭和研究会資料」（全8巻）には、後藤隆之助が主宰して1933年に発足した民間国策研究機関である昭和研究会の関係資料を収録してい

ます。昭和研究会は近衛文麿のブレーン集団として、政治、外交、経済、教育、文化などの分野にいくつもの部会をもつ専門研究会を設け、数多くの政策研究案を立案していきました。本集成には、これら各専門部会の会合要録を中心に331件の資料を収録し、本年8月、第38巻を刊行して完結の運びとなりました。

このように、東洋研究所において、『松方正義関係文書』と『昭和社会経済史料集成』という二つの編纂事業を終えることができたのは、財政的に支援し続けてくれた学園・大学側の理解と、身近にあつて辛抱強く支えてくれた歴代所長や研究員の協力であると、心より感謝するとともに、東洋研究所が大学附置研究所として存在するからであると、強く確信するところであります。いままた、東洋研究所では、『藝文類聚 巻85』（主任：福田俊昭）、『茶譜 巻4 注釈』（主任：藏中しのぶ）、『天文要録』の考察（一）（主任：小林春樹）の刊行をすすめ、明年度には『晋書校補 本紀1』（主任：渡邊義浩）の刊行も始まるというように、共同研究の成果を着実に発表し続けております。



2011年度（第27回）東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。受講者総数は延べ125名（一般103名、教職員22名）で、各講座の概要は以下のとおりである。なお昨年に引き続き、長年ご出席いただいた方2名に対して記念品を添えて表彰した。

◇第1回 11月10日（木）13：00～15：00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

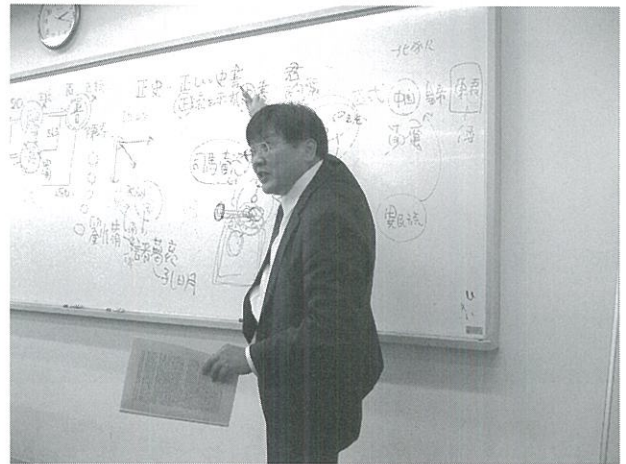
テーマ：魏志倭人伝の虚実

講師：渡邊 義浩（東洋研究所兼任研究員、文学部中国学科教授）

魏志倭人伝は、曹魏—西晋の正統を示すために、西晋の史家陳寿が著した『三国志』の一部である。儒教において、中華の天子の徳は、それを慕って朝貢する夷狄の存在によって証明される。このため『三国志』は、曹魏と国際関係を結んだ異民族を正統性を示す夷狄として優先的に列伝に記す。二十四史において、異民族の中で日本の記録が最も多いものは、倭人伝だけである。それほどまでに力を込めて、陳寿が倭人伝を描いたのは、西晋の始祖司馬炎の祖父司馬懿の功績を宣揚するという目的に加えて、事実としても、倭国と曹魏が密接な関係を結んでいたためである。倭人伝によれば、景初三（二三九）年から正始八（二四七）年までの九年間に、倭国は曹魏に四回朝貢し、曹魏から使者が二回派遣されている。平均すると約十八年に一回となる遣唐使に比べ、はるかに頻度が高い。

曹魏が夷狄に与えた称号の中で「親魏○○王」と『三国志』が表記するものは、卑弥呼に与えられた「親魏倭王」の他には、「親魏大月氏王」しかない。称号の形が同一であることは、二つの国家の重要性や力量が同等に位置づけられていたことを意味する。「親魏大月氏王」は、蜀漢の北伐に対して、涼州の背後を固めるために賜与されたものであり、大月氏国は、王号にふさわしい大国であった。曹魏が卑弥呼を「親魏倭王」に封建し、規定の回賜に加えて特別な恩寵を示したのは、孫呉の海上支配に対抗するためであった。

したがって、邪馬台国は会稽東冶の東、帯方郡から一万二千余里の彼方にある東南の大国と位置づけられた。会稽東冶の東の海上は、台湾の北方にあたる。邪馬台国論争において、九州説は距離が、大和説は方角が合わないことは、『三国志』の



偏向のためなのである。倭国の戸口は、邪馬台国が七万余戸、投馬国が五万余戸、奴国が二万余戸とされる。その他（対馬国の千余戸・一支国の三千・末盧国の四千余戸・伊都国の千余戸）とあわせると、倭国は約十五万戸の大国となる。遼東半島から朝鮮北部を支配していた公孫氏が滅亡した際、接收された戸が約四万であったことを考えると、大月氏国に匹敵されるため、いかに大国に描かれているのかを理解できよう。

倭国は中国の東南にある、という陳寿の理念は、倭国の習俗を記す部分にも多く表れる。たとえば、倭人伝の中でも有名な「黥面・文身（顔面と身体に入れ墨）」という習俗は、『礼記』王制篇における、東方の「夷」は「身に文（身体に入れ墨を）」し、南方の「蛮」は「題（ひたい）に彫んで（額に入れ墨をして）」いた、とする記述の複合である。このように倭国の表現の中には、三国時代の世界観が擦り込まれている。

魏志倭人伝には、詔や使者の報告書という一次史料に基づく「実」の部分と、当時の政治状況や国際関係を理由とする偏向を含む「虚」の部分が含まれているのである。

◇第2回 11月17(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：現代の日本人が、中国古代文化から得るべき教訓

—陰陽五行思想・天人相関思想・災異思想を中心として—

講師：小林 春樹（東洋研究所准教授）



その王が「神の子孫」、すなわち「現人神（あらひとがみ）」であると見なされ、王朝自体も「神の王国」であると考えられた殷（＝商）王朝（?～前11世紀頃）を倒して成立した周王朝（前11頃～前771）とその王は、「天」の代理者としてこの世を支配する「人間の王朝」であり、また「人間としての君主」、すなわち「人君」として見なされた。しがたって悪政等によってひとたび「天」の支持、すなわち「天命」を失えば、それらは、新たな王朝とその君主にその地位を奪われる、相対的存在であるとも考えられたのである。

秦帝国が樹立した皇帝専制支配体制を継承、発展させた前漢王朝（前202年～後8年）とその皇帝であるが、その権威と権力の正統性の根拠を「天命」にもとめる点においては、周王朝とその王と共通する性格を有していたといえる。

しかしながら「天」との関係についていえば、以下のように、陰陽・五行思想、災異思想、天人相関思想などの伝統的諸思想を摂取することによって、周代のそれよりも格段に複雑化するとともに洗練された思想体系を構築しているのであり、そこにひとつの新機軸を見出すことができる。す

なわち前漢においては、1. 皇帝が「天」の代理者に相応しい人徳を喪失し、また善政を行わない場合、「天」は、地震、洪水、異常気象等の自然災害を中心とした「災異」を発生させて皇帝に警告を与える、2. それでも皇帝が反省して行動や施政を改めなければ、より深刻な自然災害を中心とした「怪異」を惹起させて最後の反省を促す、3. それでもなお皇帝が自戒しなければ、「天」は、最後通牒としての「殃（おう）咎（きゅう）」を降したうえで前漢とその皇帝を滅ぼす、とされたのである。

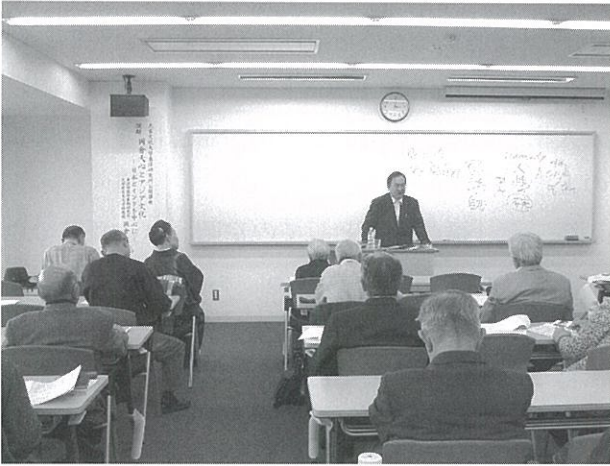
周王朝に始まり、前漢王朝期にひとつの完成形態に到達した上記のような思惟を、仮に「『天』への信仰」と称するならば、それは、「天」と「自然」に対する畏敬の念、さらにいえば畏怖の念に支えられていることを以て第一の特色とするものであったといえる。そしてそのような理解が正しいとするならば、それは、M. フーコーの所謂「権力」の誘導にやすやすと騙されて、ヒロシマ、ナガサキ、第五福竜丸という数数の、痛切に過ぎる歴史的諸経験から遂に何如なる教訓をも得ることがなかった「現在（いま）、日本（ここ）に生きる日本人」が、今こそ学ぶべき切迫した教訓を内包した、「豊饒なる智の遺産」と言い得ると考える。



◇第3回 11月24日(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：岡倉天心とアジア文化—日本とインドを中心に—

講師：岡倉 登志（東洋研究所兼担研究員、文学部英米文学科教授）



「岡倉天心とアジア文化—日本とインドを中心に」が公開講座のタイトルでしたが、講演では、前半部で岡倉覚三（天心）の国際的活動の概要を年譜を用いながら考察した。

最初に国際人天心の源が横浜生まれという点のみならず、父親が開明的な松平春嶽の福井藩士であったことに注目すべきことを指摘した。次に天心には狭義の国粹主義、アジア主義のレッテルが張られることが多いが、少年期から青年期までにヨーロッパ文明を受容する素養が育まれていたことを見失ってはいけない。いいかえれば、「西洋のものでも良いものは良い」と考え、ダヴィンチ、ミケランジェロやベートーヴェンらを評価していたが、美術に関しては東洋の者の方が精神的に優れていると認識していた。これは1886～87年の初めての欧米外遊の体験も関係していたであろう。この外遊中に天心は、大日本帝国憲法に影響を与えたシュタインと二回親しく語り合っている。また、「ループルを素通りした」と非難されたが、そうした事実は確認されていない。

1893年にはシカゴ万博の日本館「鳳凰殿」の設計プランと特に美術史を考慮した内装を美術学校総動員で仕上げた。この博覧会に高村光雲が「老

猿」を制作した経緯を紹介した。1897～8年にはブランクリー編“Japan”の図録で日本画を歴史的に紹介しているが、狩野派の例では永徳、友信でなくあまり注目されていなかった之信の「三聖吸酢」を紹介しているが、このテーマは代表作『茶の本』にも言及がみられる。1898年には美術学校騒動があったが、その背景には帝国博物館理事や万博理事のポストならびに出典の目玉「日本美術史」の編纂方針の相違があったと確信している。

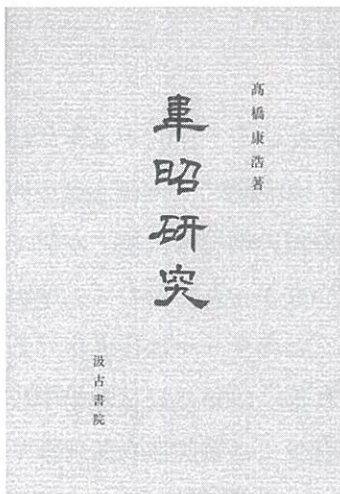
後半部では英文三部作と『東洋の覚醒』として知られることになったノートが書かれた1901～6年までの思想のうち、The Ideals of East, The Book of Tea にしぼって話された。1902年に10カ月余滞在したインドではヒンドゥー改革派で普遍宗教を主張したヴィヴェカーナンダとタゴールとの出会いの重要性と天心の著作にヴィヴェカーナンダの弟子のアイルランド人ニヴェディタやタゴール家に集った人々の果たした役割が大きかったことや、天心の仏教への関心の深さが指摘された。そのほか、『茶の本』で最も主張したかったことは茶道が総合芸術であること、双龍が宝珠を争う姿に東西文化の関係を示唆し、天心はタゴール、ロマン・ロランらと同じく自然環境保護などを含む広義の平和主義者であったところを学ぶべきであると結ばれた。



在りし日の岡倉天心

〔研究員の著書紹介〕 高橋康浩著『韋昭研究』

本学文学部教授（兼担研究員） 渡邊 義浩



『韋昭研究』
高橋康浩著
汲古書院
2011年8月刊

高橋康浩（東洋研究所兼任研究員）著『韋昭研究』（汲古書院、2011年）は、陳壽が『三国志』を著す際に、「呉書」（『三国志』巻四十六～巻六十五）の原史料とした『呉書』を著した史家である韋昭に関する総合的な研究である。高橋氏は、韋昭を二つの側面から論じている。

第一篇「学者としての韋昭」は、韋昭の注釈より窺い得る学問のあり方を解明する。韋昭はその『国語』注に多くの『左伝』を引用するが、それに加えて魯紀年を附すことにより、春秋内伝と言われる『左伝』に呼応する「外伝」として『国語』を位置づけた。韋昭の注は、鄭玄学の継承、史的

解釈の傾向、内・外伝の一体化に特徴を持ち、単なる経学的解釈を超えて、「経」と「史」を巧みに融合させたものである。また、韋昭は『国語』のほか、『漢書』にも注をつけたが、その『漢書音義』は、孫呉における『漢書』受容の集大成であり、天人相関説・災異説など神秘的な思想において鄭玄の大きな影響を受けている。

第二篇「孫呉人士としての韋昭」は、孫呉の臣下としての生き方を論ずる。博打の禁止を説く「博弈論」は儒教的理念の発露であるが、そこには、二宮事件に苦しむ太子孫和の正統性と人材希求が主張されている。また、三国政権はそれぞれ鼓吹曲という軍隊が行進する際の楽曲と歌詞を持つが、韋昭が著した呉の鼓吹曲は、国家の正統性が色濃く繰り返し述べられる。そして、韋昭は、呉の正史にあたる『呉書』を著しているが、その中に見える偏向と主張からは、正統性の不在に苦しむ孫呉政権成立の経緯と、新たに生み出そうとした存立の根拠を見ることができる。

日本はもちろん中国でも韋昭に関する専論はなく、高橋氏の『韋昭研究』は、三国時代における学術の研究に大きな位置を占めることになろう。

片岡弘次教授（本研究所兼担研究員）が日本翻訳家協会の「特別賞」を受賞

日本翻訳家協会では、2011年10月1日に第48回日本翻訳文化賞、第47回日本翻訳出版文化賞、特別賞を発表し、本学国際関係学部の片岡弘次教授がムハンマド・イクバル著『ジブリールの翼』の翻訳で特別賞を受賞した。イクバル（1877～1938）は、パーキスターンの国民的詩人として知られ、1935年刊行の『ジブリールの翼』は彼の最も優れた詩集として評価されている。片岡教授は、イクバルについて日本では、南アジアの歴史の中で、政治家と考えられがちだが、本質は詩人であり、その詩はパーキスターンの人々の心だけでなく、世界中のイスラーム教徒の心を表すものと



してとらえ、翻訳紹介につとめてきた。

なお、片岡弘次訳、『ジブリールの翼』は、公益財団法人 大同生命国際文化基金の発行で、「アジアの現代文芸」シリーズの56冊目にあたり、パーキスターンとして

9冊目の作品として2011年3月に刊行されている。

【機関誌】

- 東洋研究 第180号（2011年7月25日発行）
福田 俊昭…『朝野僉載』に見える嘲嗤説話（前編）
小林 春樹…『漢書』の正統観・漢王朝観について—板野長八の理解の再検討—
高橋 康浩…韋昭と神秘性—鄭學との関わりを中心として—
松本 照敬…ラーマーヌジャ思想の研究（8）
瀧口 明子…欧米茶書の中の東洋—シモン・パウリ『煙草・茶論』研究—
- 東洋研究 第181号（2011年11月25日発行）
武田 知己…外務省と知識人 1944—1945（一）—「ジャポニカス」工作と「三年会」—
兵頭 徹 …海軍省調査課と囑託の役割（七）—国内思想戦と調査課ブレーン—
岡倉 登志…アメリカ帝国の形成と文化・イデオロギー—アメリカ・フィリピン戦争を中心に—
齋藤 俊輔…ポルトガル領インディアの防衛と総督—1546年の第二次ディウ包囲を事例に—
- 東洋研究 第182号（2011年12月25日発行）
安保 博史…芭蕉供養の研究—元禄期を中心として—
由川 稔 …オユ・トルゴイ、タバントルゴイ、新鉄道等、
鉱業関連領域に見る、モンゴル国の市場経済の深化
柴田 善雅…中国関内開港地日系銀行の活動
岡崎 邦彦…1937年西北善後処理問題（下）—「2・2事件」と三位一体の瓦解—
- 東洋研究 第183号（2012年1月25日発行予定）
小坂 眞二…十二世紀代の怪異六壬式占文について（一）
濱 久雄 …礼の起源とその展開—凌廷堪の『礼経釈例』を中心として—
渡邊 義浩…王莽の官制と統治政策
中村 聡 …『博物新編』と科学教育
井上 貴子…インド古典芸能の美学とヨーロッパの美学
—カラー、ラサ、バクティ、そしてアートの位置づけをめぐって—

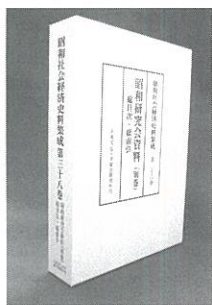
【刊行図書】

- 昭和社會經濟史料集成 第38巻 昭和研究会資料（別巻） 総目次・総索引（2011年8月31日発行）
A5判 551頁 東洋研究所教授 兵頭 徹、大東文化大学名誉教授 大久保 達正・永田 元也 編集
- 藝文類聚（巻85）訓讀付索引（2012年3月25日発行予定）
B5判 東洋研究所教授 福田 俊昭（代表）他6名共著
- 『茶譜』巻4 注釈（2012年3月25日発行予定）
B5判 東洋研究所兼担研究員 藏中しのぶ、東洋研究所教授 福田 俊昭 他著

◇東洋研究所事務室人事◇

穴戸 哲夫 2011年10月1日付 東洋研究所事務室付
兵頭 徹 2011年10月1日付 事務長兼務

新刊案内



昭和社會經濟史料集成 第38卷 昭和研究会資料 (別卷) 総目次・総索引
兵頭 徹・大久保 達正・永田 元也 編集
2011年8月31日発行/A5判 551頁/頒価¥9,000 (税別)

本巻は、第31巻から第37巻に収録した「昭和研究会資料」の別巻とし、第Ⅱ期分全7巻の総目次・総解題に総索引を付したものである。さらに、昭和同人会を中心とした資料13件を補遺として新たに採録した。

《既刊》第1～30巻 海軍省資料(1)～(30) 第31～37巻 昭和研究会資料(1)～(7)

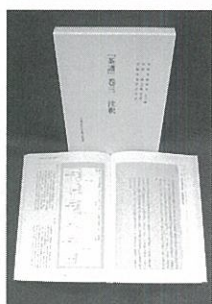


藝文類聚(巻84) 訓読付索引
大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 福田 俊昭
2011年2月10日発行/B5判 93頁/頒価¥4,000 (税別)

『藝文類聚』は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。本書はその『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に重要語彙索引を掲載したものである。

巻84は、「寶玉部下」の璧 珠 貝 馬瑙 瑠璃 車渠 瑇瑁 銅を収録している。

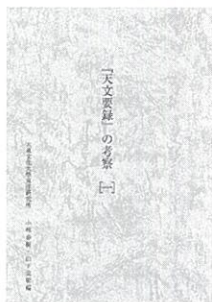
《既刊》巻1～巻16、巻80～巻83



『茶譜』巻3 注釈
藏中しのぶ・福田 俊昭・相田 満・安保 博史・矢ヶ崎 善太郎・渡辺 信和共著
2011年3月25日発行/B5判 186頁/頒価¥7,000 (税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

《既刊》巻1、巻2



『天文要録』の考察 [1]
小林 春樹・山下 克明編
2011年3月25日発行/B5判 107頁/頒価¥3,000 (税別)

唐の李鳳が撰した『天文要録』全五十巻の第一巻(尊経閣文庫本の第一冊)の原文を翻字したうえで、訓読文、現代語訳、そして語釈・参考資料を施すとともに、関連する論文一篇を付した、当該書に関する斯界初の専著である。

☆この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4
TEL (03) 3265-9764

■池上書店 (大東文化大学板橋校舎内)

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1
TEL (03) 3932-7567

■進明堂 (大東文化大学東松山校舎内)

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
TEL (0493) 34-4430

大東文化大学東洋研究所所報 No.56

2011年12月25日発行

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10

TEL(03)5399-7351 FAX(03)5399-8756

E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>

印刷 (株)東京技術協会